

《幻命》の幻獣 —ザラキ神官が転生させられたそうです—

altelなヤフエト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちは、aitenaヤフェトさんです。

急に思いつきましたので書きました。不定期更新となります。

今回はクリフト(ドラゴンクエスト4より)を主人公にしまして、モンスターハンターの《幻獣》キリンに転生するお話です。

ただ、モンハン編が完結次第、予定している別の世界に飛ばすつもりです。

また、駄文ですのでお気をつけください。

あとキャラ崩壊注意

目次

転生—MONSTER HUNTER—

I・転生させられました	1
II・いきなり襲われました	7
III・Side Hunter's	12
IV・久しぶりに旅でも	15

転生―MONSTER HUNTER―

I・転生させられました

《side：クリフト》

・・・ここは、どこだろう。

「確か私は死んだ筈だ。寿命を迎えて、姫様や、ソロ、皆さんに看取られながら、死んだはずだ。」

それに、本当にここはどこなのだろう。真っ白な部屋みたいだ。

・・・本当にどうしよって誰か来たっ?!

「やあ!お目覚めのようだね!」

「へっ、えっ」

目の前に現れたのは、赤い一つ目の付いた黄色い大きな魔女帽を被り、これまた黄色の長袖シャツと茶色のズボン、紫色のマントを纏った、長い青髪と赤目の少年だった。

少年は、ヘラヘラと笑いながらこちらを向きながら話す。

「サントハイム神官、クリフト君だっけ?キミ、自分はもう死んだはず、と思ってるよね?」

当たり前だ。だが、口に出していないのに思っていることがバレるとやはり、私も驚く。

「話を続けるよ。キミは確かにあの”世界”では死んだ・・・つまり、もう存在できないし、必要なくなったんだよ。」

「?!必要なくなったとはどういう事です!それに、あなたはだれで」「世界に存在するモノってね、その世界に何かしら必要だから存在しているんだよ。」

で、死つていうのは、その《存在》が世界に必要なくなったから起こるものなんだ。そして、死んだモノの魂は浄化されて、別の世界や、その世界の別のモノに生まれ変わらせられるんだ。」

私の間の言葉が終わるよりも早く、彼は一つ目の質問に答えた。

確かに、そんな気はしていた。生死の呪を扱えたが故だろうか。

しかし、何者なのかは彼は言わない。とりあえず、もう一度彼の方

を見る。

彼は「続けるよ?」と言って話を続ける。

「で、本来ならキミもその流れに乗る・・・はずだったんだよ。」

彼は、人呼吸置いて、私の目を見て言った。

「キミは、流れに乗ることができなかつた。」

多分、生死の呪は、キミの魂を人とは違う、異質なものにしちやつたんだろうね。

これは、悪魔や天空人に見られる症状さ。」

悪魔や、天空人? 異質?・・・ため息をついた。

私は人とは違うモノに成ってしまったのか、という。

だとしたら、私がここにいるのに納得がいく。

なら、これからされるのは人の道から外れてしまった私への罰なのだろうか。と思った。

しかし、そうでは無かつた。返ってきた答えは違つたのだ。

「で・・・キミは、別の世界には必要なんだ。だから、別の姿で、転生させることに決まりましたー!」

一瞬、耳を疑つた。

転生? いや、それ自体に疑問は無いのだが、別の世界?

えつ? と思ひ、また彼の方を見る。

「キミは流れに乗れなかつたって言ったただろ?」

本当なら、前世の記憶は無いはずなんだけど、キミは別ルートで記憶を持ったまま、別の世界に送るよ。」

「そういうこと、ですか・・・。」

よく分かり、納得した。

彼は、腰にさしていた、瞳をかたどつた装飾の短剣を抜き、言う。

「さ、そろそろ行く時間、なんだけど、キミには、まず新しいカラダに慣れてもらうため、練習のための世界に行つてもらおうよ。」

そう言い、何かの呪文を唱えた。途端に眠気が襲ってくる。

朦朧とする意識のなかで、最後に聞いたのは、彼の声だった。

「あ、一つ答えてなかつたね。ボクは、時空の番人さ」

そして、私の意識は途切れた。

「場所：??？」

ここはどこだろう（2回目）

周りは1面真っ白で、吹雪いている。

しかし、不思議と寒くない。

立とうとおもったが、いつもより少し目線が高い程度だが、手(?)と足を着いた状態から起き上がれない。

どうしてだろう・・・

『キュヒイヒイ・・・』

そう言おうとして漏れたのは、馬の鳴き声のような、しかしどこか幻想的な声。

驚いて、たまたま後ろにあった氷で姿を見る。

『ヒイヒイイン?!（なんですかこれええ！）』

今の私の姿は、頭に蒼い角を一本持ち、青い毛と、真っ白な毛に包まれた、雷を纏った馬の様な生物だった。

ああ、そう言えば彼が言ってたな。転生するって。

しかし、つまりここが《練習の世界》か？

・・・もう考えるのやめようか。

とりあえず、問題なく動ける。身が軽く、ジャンプ力もかなりある。・・・羽無くてよかった。

見た所ここは雪山だろうか？

寒くないのはこのカラダだからだろう。

そう言えば、魔法は使えるのだろうか？

ザオリクは・・・死体がないから無理だ。

ザラキは・・・気が引ける。と言うか生き物をまだ見ていない。なら、マヌーサ辺りだろうか？

手が無いので、詠唱くらいしかないだろうっ！

・・・えっ。念じたらなんか出来たんですが。

ついでに雷も落ちたのですが、
何ですかこれ。いや、本当に。

そうか。念じたり、叫べば出来るのか。分かった。
しかし、ここまでは良くても問題は衣食住だ。

衣・・・は要らないだろう。

食・・・肉食か？何だか嫌だな・・・

まずは住処を探しますか。

私は、とりあえず下山してみることにした。

《幻獣神官下山中・・・》

ああ、いい洞穴があった。外から分かりにくいし、いい感じに暖かい。地熱？でしたっけねえ・・・

地面に寝る、というのは野宿で慣れていましたが、近くに毛皮が放り出されていたのでそれをベットにすることにしました。

暖かい・・・姫様も暖かかったなあ・・・

そのまま、眠りに落ちよう、とした時だった。

「グルアアアア！」

獣の咆哮が鳴り響いた。洞窟の入り口の近くだ。

なんだと思っ出て見る。

大きな前脚には翼がついており、どこか原始的な感じの、龍がいた。オレンジというか黄土色というか、そんな色合いをした龍は、こちらを向いた。

「グルルル・・・(食い物だ・・・)」

涎を垂らしたあと、こちらに真っ直ぐに突っ込んできた。

私は、軽くそれをかわした。

龍は勢い余って山壁に牙をくい込ませてジタバタしている。

個人的には、殺めるのは最終手段にしたいので、まずはマヌーサで
追い払おうか。

『キュウウ・・・ヒイイイ・・・(ふう・・・マヌーサ！)』

幻惑を見せる霧が立ち込める。龍は牙を岩から抜き、こちらを向こうとした瞬間に呪文が発動したようだ。

龍は一瞬、驚いたようだが、スグにたちどまり、

「Guooooooooooooooooo!」

鼓膜が破れるかと思うほどの轟音で、咆哮する。

霧も払われた。

スグに攻撃に転じようとした瞬間、龍は突進しながら目の前にいた。

《死》

その文字が脳裏をよぎった。ああ、もう死ぬのか、と。

そう思った瞬間、私の周りから黒い髑髏のような塊が、龍に向かって飛ぶ。

龍に髑髏が当たった瞬間、地に倒れ伏し、動かなくなった。

ああ、そうか。咄嗟に私はザラキを唱えたいたのか。

これは怖いな……。

そう思いつつ、龍の前に行き、この呪文を試すことにした。

『キュイイ……(ザオリク……)』

パアア……と光が龍を包むと、数秒後、龍は目を覚まし、首を持ち上げてこちらを見た。

「グルル……(俺は、死んだんじゃ……)」

『ヒイイイン……(御免なさい、私のせいです……)』

「ガルルツ?! (お前がっ?!)」

龍はバツと立ち上がり、突進ではなく、こちらを向いた。

『ヒイイイ……(ごめんなさい、ごめんな)』

「グラアア! (お前、スゲエじゃねえか! なんて言うんだ?!)」

帰ってきたのは予想外の答え。

とりあえず答える。

『ヒイイイ (わ、私はクリフトと申します)』

「グラアア! (クリフトつつーのか! 俺はティガだ! なあ、さつきは襲っちまってすまねえな……)

腹減って……)」

お腹すいてたんですか……なら、襲われても仕方ないですよ
ねえ……。私の方が小さいのですし。

そう納得したら、私の腹の虫がなりました。

グウウウ

『ヒイイ（あはは・・・私もお腹空きました・・・あ、襲われたこと、怒ってないですよ）』

「グララ（本当にすまねえ。お詫びと言ってもなんだが、いいポポの狩場、一緒に来ねえか？お前も肉食だろ？）」

『ヒイイ（いいのですか？ありがとうございます）』

もういいか。うん。生き残るためには色々あれですし、もう私は神官では無いですし。

とにかく、私はティガさんについていき、その《ポポ》の狩場に案内してもらいました。

Ⅱ・いきなり襲われました

ポポの狩場にティガさんとやって来ました。なるほど、ポポとは、この毛の長い大きな牙のある動物の事なのですね。

ティガさん曰く、「ものすごく旨い」のだと。

今、ティガさんは噛みつきや突進で仕留め、食べています。私も、やらないとなあ……

『ヒイイイン（どうやって狩ろう）』

ザキはあまり使いたくない。緊急手段で最終手段だ。

マヌーサはティガさんにも影響が出てしまう。

……そういえば、マヌーサの試し撃ちの時、雷が出ていましたね。念じれば、出来ますかねえ……。

ものは試し。やってみることにしよう。

角の辺りを意識して……

バリバリバチイン！

わお。威力、凄いですね……。放電なども出来そうです。当たらなかつたし、やってみますか……

《幻獣神官&轟龍狩猟中……》

おそらく30分後。私は2体ほど、ティガさんは10体ほど狩猟しました。

ポポの肉、かなり美味しいです。脂がのっついて、なんというか、霜降りっぽい感じでしょうか

やはり流石というか、ティガさんはガンガン狩って行き、ドンドン食べています。現在進行形で。

2体目を食べ終わる頃には、ティガさんは、ものすごく満足そうな顔をしていました。

まあ、美味しいですし。

「グララ(な?ポポ美味かったろ?ま、ガムートやハンターがいなくてよかつたぜ)」

『ヒイイイ?ヒイン?(ガムート?ハンター?)』

聞き慣れない名称。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥と言いますし、質問をする。

ティガさんは快く答えてくれた。

「グララララ、グルルルル・・・(ガムートつつーのは、ポポの群れを守ってる、まあ、ものすごくデカイ奴だ。俺の牙もアイツの皮膚には歯が立たねえ。)」

なるほど。自然界にはそうやって過ごす者もいるのか。

・・・まあ、知っていて損は無いどころか、知らないと死にますよね。私。

「グルラララ(で、ハンターつつーのは、人間。その中でも、武器を持って俺たちを”狩猟”しに来る奴らだ。

アレは強い。俺は、目の前でガムートが狩られたのを見た。)」

『ヒイイ・・・(人間・・・)』

今はこの姿だとしても、私は元々は人間だ。

少し、申し訳ない気がしてやまない。

ふと空を見上げ、朱色になってきたのを見て、ティガさんに『そろそろ帰ります』と言おうとした瞬間。

「おい、あれは目的のティガレックスじゃねえか?」

「そうね。さつさと狩りましょ。」

「なあ、あの隣にいるの、キリンじゃねえか?」

「生態未確定だったわよね。燃えてきたわ!」

4人の人間の声があった。

振り向けば、今私達がいるところより下・・・崖の下に彼等はいた。よく見れば、ボウガンのようなものや、ハンマーのようなもの、大きな剣を担いでいたり、弓を持っている。

「グルアアア! (マズイ、ハンターだ。クリフト、逃げろ! 狙いは、俺だ。)」

『ヒイイイ!? (何故狙いは貴方だと分かるんですか?!)』

「グルル・・・(何度もハンターに襲われているからだ。それに、こっちに向かっている。)」

彼等がハンターなのか。大きな武器を持っている・・・

テイガさんは私に逃げろと言いましたが、そんな気は起こらない。

『ヒイイ・・・(私も、手伝います)』

何故なら、どこか彼・・・ソロに似ている気がしたからだ。何がとは言わないが、似ているから。

テイガさんは、私に「本当に良いのか」と聞いてきましたが、もちろん、いいんです。

そして、ハンター達が目の前まで来ました。

「ライナ! 後ろからテイガレックスを狙え!」

「分かってるわよ、ソデイ。ケルは毒瓶よ」

「リョーカイ。アリーナ? ヘマするなよ。」

「分かってるわよ! 行つくわよー!」

一瞬間こえた、”アリーナ”という名前。

姫様と同じ名前だ。あのハンマー使いは。

私がたじろいでいる間に、テイガさんは突進し、ライナという女性と、ケルという弓使いの男性を蹴散らした。

私も、すぐに臨戦態勢に入り、広範囲に雷を落とす。

私に攻撃を加えようとした、ソデイという、大剣を持った男性が吹き飛ばされた。

そこで少し安心したのが行けなかったのか、アリーナが私の頭目掛けてハンマーを振り下ろす。

それを邪魔するようにテイガが岩(氷塊?)を飛ばす。

私も、なにかせねばと思い、スクルトを唱える。

黄緑の雷が落ちると同時に、緑色の防護膜が私とテイガさんをつつむ。

テイガさんに放たれたライナの弾は、呆気なく弾かれる。

再度放たれた、ソデイの攻撃は、私に当たるが、ダメージはほとん

ど無く、弾かれ、少し刃こぼれする。

「なんだよつ、このキリンが変わった雷を落とした瞬間、硬くなつた・・・だと?!」

「なんなのよコイツ！全然あたらないじゃない!」

「とにかく攻めるわよ。狩り技つ、”エナジーボール」

『ヒイイーン！（マホトーン!）』

明るい紫色の雷が放たれると同時に、ライナが放った球体が消える。

マホトーンにこんな使い方が・・・。

マホステの役目だと思ってたが、ものは使いようですね。

かなり有利になったと思ひ、安堵したのも束の間。

丁度スクルトが切れたところに、アリーナの思い一撃が、ティガさんに決まってしまうました。

地に1度倒れながらも、すぐ起き上がり、私にアイコンタクトで（一旦退く）と伝えると、大ジャンプでどこかへ行ってしまうました。

ハンター達の視線は私に集まり、武器を構えてきました。

ティガさんにあんなことをしたのと、私はもう人間ですらないことを思い、ある呪を唱えることにしました。

攻撃を、軽くかわし、少し離れたあたりで私は止まりました。

ハンター達は、当たり前ですが、警戒しながらも一斉攻撃の構えを取りました。

数秒過ぎ、先に動いたのはハンター達・・・ですが、その攻撃が決まることはない。

それよりも速く、私は黒紫の雷と共に、一つの髑髏を模した塊を放ちました。

ザキ・・・死の呪文。

魔物には効きにくいのが、人間には確実に効くことを私は知っている。

その髑髏は、ソデイの当たり、数秒後、ソデイは倒れ込みました。

「ソデイ?!・・・息、してない・・・」

アリーナが駆け寄り、ソデイを確認した。

当たり前、なのかは微妙ですが、死んでいます。

ほかのハンターたちが駆け寄り、確認をしている光景を見て、自分が何をしたのか分かりました。

殺した。食べる訳でも無い、殺した。それだけ。

人間だったからでしょうか。罪悪感が襲ってきました。

すぐに蘇生させるため、雷を消して近づきました。

無論、ハンター達は臨戦態勢を取りましたが、私が攻撃しないと分かったのか、攻撃しようとする構えは解きませんでした。こちらを見るだけでした。

ソデイの死体の前で、ザオリクを唱える。

テイガさんの時と同じく、暖かな光がソデイの死体を包む。

光が止むと、ソデイは目を開けました。

「えっ・・・俺・・・」

「い、生き返った?!あのキリン・・・」

「なんだ?!特殊個体?」

「あの、皆?時間切れ・・・」

「「あ」」

ハンター達は私の方をもう一度見た。

『こんな事を私の目の前でするな』というような意味も込めて、一つ、青白い雷を落とし、私は洞窟へと戻りました。

ブルブル
：洞窟に戻ってから気が付きましたが、あそこ、凄く高かった・・・

Ⅲ・Side Hunter's

「ベルナ村」

ベルナ村。ムーファやフェニーは特に有名で、一時期、《斬竜》ディノバルドが出たということもあり、そこそこ有名な村である。

また、かの《天廻龍》シャガルマガラを討伐したというかのハンターが所属していたという『我らの団』の団長と、看板娘のソフィアも現在滞在しているようだ。

そんな村のとある家の中で食事をするハンターが4人。

「こんがり肉Gうめえ！」

大剣使いのクシヤナフル装備の男・ソディ

「食べ過ぎるんじや無いわよ？」

ヘビィボウガン使いのフィリアフル装備の女・ライナ

「まあ、確かに旨いな。」

弓使いのフルフルフル装備の男・ケル

「ええー！ハニーバターが効いてるわー……」

ハンマー使いのケチャSフル装備の女・アリーナ。

彼らは、最近上級に上がり、やっと星9まで登りつめたハンターチームだ。

そして、現在、《ある事》でギルドからも頼られ、有名となっているチームでもある。

《ある事》それは……

「ハンターさん！ギルドマネージャーが件のキリンの事でお話があるよ！」

そう。最近《雪山》に現れたという、特殊なキリンと対峙し、そのチカラをしっかりと見たのだ。

ソディが1度、『黒い髑髏の様な塊の様なもの』により死んでおり、『キリンのチカラにより生き返った』のである。

更に、『黄緑の雷を落とし、テイガレックス共々硬化した』、『紫の雷を落とし、狩技を封じてきた』

などといったことも目撃している。それも間近で。

それは一ヶ月前の話なので、ほかのハンターもそういったことをするキリンに遭遇しており、報告もある。

だが、最も間近で見たのは彼、彼女らだけなのだ。

そこで、ギルドはそのキリンを重要調査対象に認定し、更にアリーナらを重要な、いわゆる証人としている。

龍歴院のギルドマネージャーに呼び出された4人。

ギルドマネージャーは、4人の顔を見てから言った。

「あのキリンについてなんだけどねえ、ギルドで超特殊個体……まあ、所謂二つ名モンスターだね。そう認定することにしたよ。」

ギルドマネージャーは続ける。

「まあ、単にハンターランクを上げればいいってもものじゃないし、まだ調査が必要だからねえ。」

だから、そのキリンの調査クエストをお願い出来るかい？」

「二つ分かりました！」

断る理由など無く、引き受ける以外の選択肢は、4人とも無かった。

しかし、一つ気になったことがある、ライナは尋ねた。

「しかし、ギルドマネージャー。そのキリンの二つ名は、結局何なのですか？」

そうだ。二つ名を聞いていない。

その質問に、ギルドマネージャーは答える。

「《^{ゲンメイ}幻命》……幻の様に不思議なチカラを使い、命を操作する。その様子から……お前さん達の証言や、ほかのハンターからの報告を合わせ、そうギルドで名付けられたよ。」

ギルドマネージャーは、4人にクエストは受付に伝えてあると言いつつ、また、他のハンターも何人か同じクエストを受けているが、皆G級との事を伝える。

4人は、すぐに準備に取り掛かり、クエストを受けることにした。

クエスト名：《幻命》キリンの調査

受注条件：G級2以上（例外あり）

クリア条件：《幻命》キリンの手掛かりを見つけてネコタクチケツトを納品。

又は、特殊な罠を用いての捕獲。

サブターゲット：なし

失敗条件：報酬金0

《幻命》キリンの討伐、または部位破壊。

契約金：1500z 報酬金：30000z

IV・久しぶりに旅でも

《Side:K》

あのハンター達が来てからどのくらい経つのでしょうか……。時計とか無いので分かりませんが、1ヶ月くらいでしょうか。

今日も洞窟でのんびりしています。

最近では、時々テイガさんが遊びに来て、雪山を連れ回されたのでこの辺り……。雪山は探索し尽くしました。

そして、この前。テイガさんが、

「ハンターが最近、何故か増えてきた」

と言っていました。何故かは私は勿論、テイガさんも分からないそうです。

ですが、前にあれだけアピール(?)したので、目的は私の調査か狩猟か……。兎に角、本能からなのか、雪山に留まるのは危険だと思いました。

確かに、この雪山も面白いです。

この多分1ヶ月の間に様々な方に会いました。

兎のような見た目で、氷上を自在に滑る ユウルさん。

鋼鉄の鱗に覆われた、嵐を操る シャナさん。

テイガさんに似てますが、熊のような顔と細い白い体つきのベリイさん。

金色の毛を持つ、ゴリラのように筋肉質の ラーさん。

他にも沢山の方がいましたが、数えたら大変で……

例えばギアさんの仲間とか。

皆さんの安全などを考えても、私は1度雪山を離れた方が良いのかも知れません。

それに、この世界は”練習の世界”だとしても、1度観て回るのもいいと思いますし。

……そうと決まれば、早速準備をしましょうか。持っただけでもアレですし。

行先は一応、決まっています。

テイガさんから色々聞きましたから。

候補のは《移籍平原》《森丘》《溪流》

・・・《遺群領》は高いそうなのでやめておきましょう。

他には《地底火山》《氷海》《砂漠》《旧砂漠》もありましたが、その辺りは怖いのでやめることにしました。

気温が、ね。

持ち物は・・・干していたポポ肉と、薬草くらいですかね？ハンターが落として行った瓶に詰めてありますので、それをポポの毛皮に包めば・・・あんまり重くない。

さて、下山です。誰にも会わないようにしないと・・・。迷惑はかけられませんから。

《幻獣神官下山中》

・・・下山、してしまいましたね。

大丈夫、この世界にいる限りはまたここに来ましょう。

途中、誰にも会いませんでしたが・・・当たり前、ですかね。隠れながら行きましたし・・・。

さて、目の前は・・・森？ツンドラでしょうか。

入る・・・以外無いですよ。ここまで来たのですから。

入ってみれば、やはり深い森です。

・・・。やけに静かな気がします。

小さな生き物・・・虫1匹すら見当たりません。

これは一体。とにかく探索でしょうか？